



Title	ラット再生肝に於ける核小体形成の変動について
Author(s)	高塚, 雄一
Citation	大阪大学, 1977, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32002
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	たか 高	つか 塚	ゆう 雄	いち 一
学 位 の 種 類	医	学	博	士
学 位 記 番 号	第	3	9	9 6 号
学位授与の日付	昭和 52 年 6 月 10 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学 位 論 文 題 目	ラット再生肝に於ける核小体形成の変動について			
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授	神前 五郎		
	(副査) 教 授	坂本 幸哉	教 授	北川 正保

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

癌細胞や胎児肝などの分裂増殖の盛んな細胞では、核あたりの核小体数は減少するが、その容量は、増大する傾向にある。

細胞周期の面からは再生肝で経時的に観察したところ、DNA 合成の準備期 (G_1 期) に上述の様な核小体の変動が認められた。

そこで、この様な再生肝の大きな核小体の組成を生化学的に検索する事より、その形成機構を細胞周期の面より検討した。

〔方法及び成績〕

Donryu 系雄ラット生後 9～10週令を用い、Higgins & Anderson の方法に従い、肝の約 $\frac{2}{3}$ を切除し、再生肝を作った。

① 肝部分切除後の核小体数の変動

核あたりの核小体数は、核を Chauveau らの方法で単離後、Azur C で染色し光学顕微鏡下に観察した。

通常、成熟ラット肝細胞核は数個 (3.1 ± 0.4) の小さな核小体を有するが、再生肝で経時的に観察したところ、2 回の DNA 合成のピークに先んじて、可逆的に核小体数の減少とその巨大化が認められ、従って細胞増殖と、このような核小体の変動は、非常に密接な関係にある事が明らかとなった。

② 再生肝・核小体中の RNA、及び DNA 含量

ラット再生肝で前述の核小体の変動が最も著明なのは、肝部分切除後17～18時間目で、この時期は RNA 合成も非常に盛んである。

そこで、この時期の肝細胞核より超音波処理により核小体を得、東らの“大きさの差による核小体の分画法” (Exptl. Cell Res., 93, 299, 1975) を用い、大きな核小体の組成を調べると、小さなものと比べ、RNA 含量の増加と共に、DNA 含量も約3倍に増加していた。

③再生肝・核小体中のリボソーム・シストロン (ribosome cistron; rDNA) 量

次に、再生肝の大きな核小体に於ける、このような DNA 含量の増加に関して、rDNA 量との関係を検討した。

再生肝の大・小の核小体より DNA を抽出し、membrane filter 法を用い、 ^{32}P でラベルした 28 SrRNA と DNA-RNA hybridization を行い、それぞれの DNA に対する rDNA の百分率を調べると、大きな核小体の rDNA の百分率は決して小さな核小体のそれよりは低くはならなかった。

この事実より、再生肝の大きな核小体での DNA 含量の増加は、決して rDNA を含む核小体オルガナイザー (NORs) と無関係の部位の DNA が巻き込まれたのではなく、NORs 及びそれに非常に近接した部位のクロマチンが増加した為と考えられる。

そこで、各々の DNA 含量を加味して、実際の rDNA 量を算出すると、再生肝の大きな核小体では、小さなものの数倍の rDNA 量を有しており、核あたりの核小体数の減少は十二分に代償されている事がわかった。

④正常肝、及び再生肝の核に於けるリボソーム・シストロン (rDNA) 量

再生肝の大きな核小体での rDNA の増加に関して、rDNA の増巾 (amplification) の可能性を検討する目的で、再生肝と正常肝の核 DNA に対する rDNA の百分率を DNA-RNA hybridization より求めると、それぞれ 0.034% と 0.032% であり、両者間に何ら有意の差はなかった。

従って、再生肝の核では、特に rDNA が欠損したり、*Xenopus laevis* の卵母細胞の様に rDNA のみの特異的に増巾している事は無かった。

⑤核小体 DNA への [^3H] - Thymidine の取り込み

更に rDNA の増巾の可能性を、核小体 DNA へのラベルした前駆体 ([^3H] - Thymidine) の取り込みの差異より検討した。

再生肝としては前述の核小体の変動が著明で、しかも核の DNA 複製期 (25～30時間) に入っていない肝部分切除後12時間目を用いた。

再生肝の DNA 複製期に於ける核 DNA あたりの比活性と比べ、核小体のそれは約 $\frac{1}{20}$ と非常に低い値ではあるが、正常肝と再生肝では特に顕著な差は認められず、また再生肝の大きな核小体に於いても、著明な比活性の増加はなく、この事実からも少なくとも肝部分切除後12時間目の核小体では、rDNA の増巾は起っていない事は明確である。

[総括]

ラット再生肝に於いて、DNA 合成に先んじて、可逆的に核あたりの核小体数の減少と、その巨大

化が発現することをみつけた。

この様な大きな核小体では、小さなものとくらべ、RNA 含量の増加と共に DNA 含量も約 3 倍に増加していたが、これは核小体オルガナイザー以外の部分のクロマチンの増加によるのではない事、更に核小体オルガナイザーの部分のみの増巾の結果でもない事が判った。

従って、巨大化したのは数個の核小体オルガナイザーの部分が 1 カ所に寄り集まり、1 つの大きな核小体を形成している可能性—“fusion” of NORs —が強い。

論文の審査結果の要旨

本研究は盛んに増殖をしている細胞に於ける核小体の形成機構の特異性を分子生物学的レベルで検討したものである。

癌細胞や胎児組織では、核の中に大きな核小体が認められることが多いが、核あたりの核小体の数は少ない傾向にある。その形成機構を細胞周期と関連して分析するため、ラット再生肝を用いて経時的に検討したところ、DNA 合成の開始と、この様な核小体の変化とは密接な関係にあること、その変化は可逆的であること、および大きな核小体は小さな核小体となるべきクロマチンが 2～3 個分一個処に集って一つの大きな核小体を形成しているという作業仮説を支持する結果を DNA 量およびリボソーム、シストロン量の分析より得た。核小体の形成機構を動的に DNA レベルで検討したのは、本研究が最初であり、細胞分化の立場からみても極めて重要な意味をもつものと考えられる。

したがって、本論文は医学博士の学位を授与するに値するものと認める。